

talk! talk! talk! エンターテイナー・山口智充さん



エンターテイナー 山口智充さん

"ぐっさん"の愛称で知られる山口智充さん。テレビをつけると彼を見ない日はない、そういっても過言ではないほどの人気ぶりだ。バラエティー番組などのテレビ出演のほか俳優や歌手としても活躍し、さらに定期的にステージもこなしているという。さぞかし多忙で大変なのかと思いきや、「仕事もプライベートも、楽しいことをしているだけ」という山口さん。そして、その楽しいことのひとつが写真を撮ることなのだとか。そこで今回は、写真についてはもちろん、仕事やプライベートでの"ぐっさん流の楽しみ方"をたっぷりと語っていただいた。

プロフィール

やまぐち・ともみつ。1969年、大阪府生まれ。サラリーマンを経て、1994年、銀座7丁目劇場でデビュー。現在はライブ活動のほか、バラエティー、レポーター、司会など幅広くテレビに出演し、さらにドラマや映画で俳優としても活躍。吹き替えやナレーション、ラジオDJや雑誌連載などもこなしている。小学校から始めたという"ものまね"は天性の才能を持ち、レパートリー数は100を超える。人物以外にも動物、効果音、ハリウッド映画によくある風景など、マニアックなものも多い。2001年、フジテレビの番組「ワンナイR&R」から生まれた歌手ユニット、「くず」ではANIKIとして作詞、作曲、ギター、コーラス、ハーモニカを担当、3月17日には待望のニューシングル「全てが僕の力になる！」がリリースされる。毎月1回、毎回即日完売だという人気のトークライブ「月極報告会」も開催中。また、3月14日には、「GUSSAN ENTERTAINMENT SHOW」と題した山口さんの全国ツアーが開催される。

二度とないその瞬間をとどめておける それがカメラの魅力

今、カメラにハマりつつあるとのことですが。

そうですね。ほんとに最近好きですね、カメラ。僕、欲しいものリストっていうのをつけていて、自分の手帳に、絶対に手に入れるぞ！ って物をバーツと書き出しているんです。そのリストを見て、その物を手にしたことを想像してよくひとりでテンションを上げているんですけど（笑）、その中に"一眼レフカメラ"ってパッチリ書いてありますからね。自分でもデジタルカメラやトイカメラを持っていることは持っていますんですけど、一眼レフカメラはね、いつか手に入れたいと思いつけているものなんです。

一眼レフカメラへの思い入れがあるのですか？

以前テレビ番組で一眼レフカメラを使わせていただいたことがあったんですけど、全然違うんですね。それが初めてではなかったんですけど、本格的に1本撮って、現像してっていうのは今までに経験がなかったんです。

やっぱり出来上がりがね、素人目で見てもなんかええなあっていう写真なんです。味があるというか、なんかうまく言えないんですけど.....でも、一番はこの、カメラを構える仕草ですかね（笑）。仕草をしたいんですね。男の子のチャンバラごっこ、ヒーローごっこと同じようなレベルの憧れで申し訳ないんですけど、小さいときにやってたカメラマンごっこを実現させたような。この仕草カッコいいですよ、（カメラを構える仕草をしながら）「オレってカメラマン！」。

（笑）とてもさまになっていらっやいますね。

でもね、カメラっていうもの自体凄く魅力的だなあと思っていますよ。そのテレビ番組で人物を撮ったんですけど、人って一瞬にして動きが変わっていくんですよ。いろいろ動きまわすし、笑ったり目をちょっとつぶったり、表情も瞬時に変わっていくでしょ。そういう動きのあるものを撮るとね、ほんまカメラっていうのはその一瞬を写すものなんやなあって思うんです。だって二度とその表情は見られないわけじゃないですか。たとえば、次の日の同じ時間に同じシチュエーションでその人を立たせて撮っても、やっぱりその瞬間の表情っていうのはそのときのものではないから違うんですね。そういう、そのときにしか無いものを撮ってるって凄いなと思うんですよ。

写真は瞬間をとどめておけるものだと。

そう、今を残せるんですね。僕、ものまねしますから、どこかそういうところがあるんです。普通に話していても瞬間を見てしまうというか。

ものまねですか？

人と話すときに、相手の一瞬の表情や仕草を脳にインプットしているんですね。それは別に、この人のくせを見抜いてやろうとかいう意識的なことはなくて、勝手にやってしまっていると思うんですけど、まさにシャッターを押すみたいに、カシャカシャッと瞬間を写真で記憶していくような。じゃあ、その人をものまねしようかなって思ったときに、脳にインプットした写真を見直せば自然にボンとできてしまう。

映像を見て研究して声を似せたり、なにか特徴的な格好をしたり、ということではないのですか。

それももちろんありますが、ああ、そういえばこういう感じやったって部分を見せられる方が、見ている人もおもしろいんじゃないかと思うんですよ。そうそう、そういう表情してたしてって共感して笑ってもらえる。そうやって瞬間を見ることを普段からしていたんでね、カメラはそれを実際に写真として表わせる、残せる。そこがカメラの魅力だと思います。

カメラを持って被写体を探す「いつもとは違うスピードになれるんです」

普段はどんなときに撮影されるのですか？

番組では今日は一日カメラを持って、目に留まった人や物を撮りましょってやったんですけど、プライベートでは、今日は一日撮影に行こうって時間をなかなか自分に与えてあげられていないんでね。だから今は、これええやんって発見したときにパチッと撮っている感じですね。

常にカメラを持ち歩いているのですか？



はい。普通に道を歩いていて、ごっつききれいな夕焼けが出ていて、街の色がぱっと変わっていく瞬間とか、あ、今いいなって思ったらパッとカメラを出して撮る。

なんかこう、写真を撮ろうと思うときて、景色だったり、物だったりをあえて見るじゃないですか。たとえば家から駅までの距離をただいつものように歩くのと、今日は駅までの間にいいところがあったら、写真撮りながら行こうって思うときて、すごくいろんなものを丁寧にみますよね。目線が絶対に違う。

カメラを持っていることで、いろいろなものが被写体になる。そうすると普段の目線とは違う目線でものを見ることができまますよね。

そうなんです。カメラを向けなかったら一んでこのないものを、あえて見ている時間っていうのが、僕はもの凄く好きなんです。

マンホールだって普段まったく見向きもせえへんに、これを撮ったらおもしろいんじゃないかなって思ったりすると、途端にマンホールがかわいく見えてきたり。いつも乗ってる自転車を、あえて写真で切り取るとすると、どの角度からどういうバックで撮るのがいいんやろうって、自転車の周りをグルグル回ってみたり（笑）。なんでもないものに愛情を持って見るようになる、深入りしてゆく感覚っていうのが好きなんです。

写真を撮る前の、被写体を探す時間というのも楽しいと。

被写体を探すことによって、いつも早いスピードで過ぎてしまう日常を、あえてゆっくりのスピードで迎えられるんですよ。いつも慌ただしく過ごしていたりしますから、なかなかそのスピードを変えることってできませんけど、カメラを持つことで、いつもとはちょっと違うスピードになれるんですね。そういうのって大事ですよ、どこか心にゆとりを持っているというか。ただの通学、通勤の道でも、ゆっくり見てみたら、新しい発見があって、どうでもいい景色がもの凄くよく見えたり、たとえば電柱に感動できたらそれだけで得したというか、楽しい気分になれるんです。

いつもカメラを持ち歩いていると、そういった新しい発見がたくさんありそうですね。

いやもう、いっぱいありますね。

だから、僕にとって写真の出来上がりっていうのは二の次、後からついてくるおまけのようなものなんです。プロの方は出来上がった写真が大事なんだろうし、僕もよく出来ていたらそりゃ最高に嬉しいですけど、ダメならダメでもええかなって感じなんです。とにかく撮る作業、こうやってカメラを構えている自分の時間がいいやん、楽しいやんって思ってます。



「東京のシンボル」



「大阪のシンボル」

写真は静止画 だからこそ伝わることもある

もし時間が取れるとしたら撮影してみたい物、撮影に行きたい場所などはありますか？

なんかこう、動きがある写真を撮ってみたいですね。さっきも言いましたけど、人なんかいいですね。構えた笑顔ではなくて、自然に話しているときに笑った瞬間とか、今にも笑い声が聞こえそうな感じの写真が撮りたいですね。

人に限らず景色でも、どこか動きがある.....どこかのペランダを撮ったんだけど、干してある洗濯物が揺れていて風を感じたり、路地でおばちゃんがあっち向いて笑っていて、相手は写っていないんだけど、その奥に相手がいるんだあって想像できたりする、そういう写真ってありますか？

その写真の前後のシチュエーションを想像させるような？

そうですね、そうですね。

写真は静止画ですけど、動画より伝わることってあると思うんです。動いてないからこそ動いているものが、ものすごい伝わってくるっていう。おばちゃんを撮った映像を見せてしまったら、こういう声でこういう大ききさでこう話しましたって、そこまですよね。でも写真だったら、このおばちゃんはきっとこういう声で、ごっつき楽しい顔をしているから、こんな話してたんやろうなって想像力が動きますよね。映像って事実を写していますから、それ以上の想像を膨らますって難しいんですよ。

なるほど。

一枚の写真に10人に見せたら、きっと10通りの感じ方があるでしょ。それって静止画には映像以上に見ることがあるからじゃないかと思うんです。想像するというより、作り上げてゆく方の"創造"ですよ。写真を見て思い描いたり、作り上げてゆく。

今はなんでもかんでもわかりやすく、こうですよ、これはこうなんですって

見せたり答えを出しちゃったりするじゃないですか。それって夢がないなあと思うんです。自分で考えたり、調べて知ろうとする力って必要なのに、なんでもハイ、ハイって。情報がたくさんあって、それをただ受け身で見て、吸収してそこで完結していることが多いですよね。

写真は見て、そこから広がる。

そうだと思います。静止画は時間がそこで止ってるから、創造しやすい、頭がよく回る。映像は映像の素晴らしさがありますけど、時間は止められないんですよ。30分の映像なら30分、その映像通りのスピードに頭がなっちゃいますけど、写真はそこから戻ろうが、一気に進めようが自由ですもんね。アルバムなんてまさにそうですね。一枚の写真にどれだけ時間をかけようが、自分のスピードで次のページをめくれますからね、それは素敵なことですよ。



「いえいえ、ここ最近の景色です」



「激動と休息」

「道に迷って遠回りになっても 違う道見られてよかったやんって思えるんです」

今はコントや漫才だけでなく、レポーターや歌手、俳優など、活躍の幅を広げていらしゃいますよね。デビュー当時からここまですを振り返って、山口さんが一番大きく変わられた点というのはどこですか？

仕事の量はもちろん増えていますが、自分自身で変わったことはないですね。たとえば今の自分と一週間先の自分を比べてみると、一週間分の出会いとか、仕事で吸収していることがあるから、その分変わったと言えるんですけど、仕事に対する自分の中のスタンスっていうのはまったく変わってないんです。

だから別に、こんなにいるんな仕事をしているなんて自分でも不思議です、とか思わないですよ。変な聞こえ方するかもしれないですけど、デビューしたときから、好きなことをしてきただけなんです。

がんばって来た甲斐あって、というのではなく、自然体で今ここにいらしゃる？

そうですね。やった、この仕事を勝ち取ったとか、週にレギュラー一本だとか、そういうのはないんですよ。たとえば今仕事が一とつしかなくても、それがすごく楽しい仕事だったら充実できるんです。もちろん楽しい仕事がたくさんあればそれにこしたことはないですけど、仕事に対する思いというか、そういうのはまったく変わってないですね。



「足元見失わぬように！」

楽しいことをしたい、というのが根本にあるんですね。

そう、楽しみたいというのが基本なんです。よく、売れなかったころの苦労話を聞かせてくださいって言われるんですけどね、それが一番困るんです。生活面では、本当に食えない時期もありましたけど、別にそれが苦労だとは思ってないですからね。それはそれで楽しかったんですよ。僕は、自分が今そういう状況にいる以上、それをどう楽しむかって考えるんです。仕事でもプライベートでもそれは一緒。ステージの上でも楽屋でも、家族といても友達といても、電車に乗っているときも歩いているときも、いつもそれを楽しみたい、楽しもうとするんですよ。

仕事が忙しくてプライベートが欲しい！なんてことはないんですね。

ないですね。休みがなくても仕事が楽しければそれでいい。今なにをしていても、楽しければいいんです。

よく周りからも言われるんです、「ぐっさんはいつでも楽しそうやなあ」って。自分でもそう思うんですけど、人よりも楽しいと思う気持ちがいっぱいある、どうでもいいことでも楽しめてしまう人間なんだなあって思うんですよ。人が失敗だと思うことでも失敗だとは思わない。ま、ある意味、ただのめたたい奴だってことなんですけど（笑）。でも、そういうふう考えられるのって、自分では得していると思うんです。道に迷って遠回りになっても、イライラするんじゃないって、こういう行き方もできるんや、違う道見られてよかったやんって思える。なんに對してもそうです、間違いにはならないんです。



「えっちゃん」

幸せのパワーで人を楽しませる 本物のエンターテイナー

今後の目標はありますか？

本物のエンターテイナーっていう存在になりたいです。エンターテイナーとして有名になりたいですね。ただテレビに出てから知ってるって言われるのではなくて、意味あることとか、「あの芸する人やる？」とか、「あの人のやるあれがおもしろいねん」って言われるようになっていきたいと思います。

テレビに出てから知ってるっていうのは、まず第一歩ですよ。それもすごくありがたいことなんですけど、テレビでなんかガチャガチャ騒いでる人っていうのではなくて、なにか確立した芸で人を楽しませられる人になりたいですね。

エンターテイナー、まさに人に娯楽を与えて楽しませられる人のことですね。

楽しませたいというのが僕のルーツみたいなものですからね。小学校のとき、同じ班の子をいかに笑わせられるか、給食の時間に、いかに飲んでる牛乳を吹き出させるかってことばかり考えていましたからね。それに快感を覚えていた子供だったんですよ。

班の単位がクラス全体を笑わせることになって、中学でそれが学年になり、高校で全校生徒になり、社会人になって就職しても市民会館に人を集めて笑わせて、吉本に入ってから、それがテレビなんかで流れて全国になって.....やってきたことは、牛乳をいかに吹かせるかを考えていたことと変わってないんですよ。今も同じ、本当に変わってないですね。

周りの友達だけだったものが、今は全国の人を笑わせている。

全国の人が「楽しませてもらってますよ」って言ってくれたらいいなって思いますね。ただ「見えますよ」っていうより、「楽しませてもらってますよ」、「笑ってハッピーにしてもらってますよ」ってなったら、それが一番じゃないですか。

でも、基本は自分が楽しいってことですから、人を笑わせるときも、自分が一番楽しんでないといけないと思っています。喜劇王は実は悲劇の人だったとか、そんなん嫌ですね。トラブルや苦労話をネタに笑ってもらったりする方もいらっしゃいますし、それはそれで素晴らしい技術だしオッケーやと思いますけど、こんなに僕は楽しいんですよっていうのを見せて、幸せのパワーで人が笑う、そういうのが理想です。なかなか人の幸せで笑えるっていうのは難しかったりするんですけどね、たまにいますよね、この人が幸せなのを見てると幸せになれるっていうの。僕もそうなるように、日々いろいろ楽しいことをどんどんしていきたいですね。そういう環境を作っていくのが大事だと思っています。

その楽しみの中に、もちろんカメラもあって。

そうです。カメラは純粋に興味として楽しめるものですからね。ずっと撮っていききたいです。撮っていきますよ。



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.